

自ら考え、主体的に取り組む体育学習の創造

～「生徒が運動技能獲得のイメージをもち、探求することを支援する体育授業の工夫」～

野沢 克美 村松 裕太 原沢 希

1. 「深く考える」授業（全体研究との関わり）

保健体育科では、各単元、どの場面で生徒が「問い」を強く意識して取り組んでいるのかを考察し、自己を俯瞰する「問い」から、主体的に運動課題を設定できるよう指導方法を検討してきた。その結果、教材・教具の工夫や応用的・発展的な練習によって「問い」を強く意識し、課題解決に向けて取り組むことが伝わってきたので、それらを意図的・計画的に授業に導入することを実践している。

保健体育の学習では、個人で活動する場合のほかに、ペアでの補助や教え合い、ICTの活用を含めグループで協働的に学習することも多い。その際、教え合った内容や他者の意見を、個人カードやグループノートに書かせ、自己表出の方法を工夫しながら自分たちの考えを発表するといった活動をすべてのクラスで実施してきた。「思考力」・「判断力」・「表現力」等の育成に関しては、自分が「理解していること」や「できること」を他者に伝えたり、表現したりすることが「わかる⇔できる」につながる要因と考える。これを実現するためには、生徒個人が課題に対する自己の見解をもち（Plan）、それを示し合ったり、表現したりすること（Do）によって共有・共感、吟味し（Check）、新たな認識の高みに至る（Action）という過程が大切になってくる。この「共有・共感、吟味」が、授業の中で数多く見られ、互いに高め合うことができるよう「問い」をもたせ、考え続ける場面を設定することを重要にしてきた。

球技を例にとると、単元が進むにつれ学び方が身に付き、グループごとに練習・作戦を工夫する場面では、教師主導ではなく生徒たちが主体的に考え、活動に結びつけていくといったことが重要である。このことは、正確な答えができるだけでなく、自分たちに何が足りないのか、どのようなことをしたらよいのかといった「課題」を投げかけることが大切で、この「課題」をより良く解決したり、発展させたりしようとした時、思考に深まりが出てくると考えた。

昨年度の研究では、一昨年の研究の成果と課題を踏まえ、単元計画に沿って授業を進めていく中で、学習プロセスのPDCAサイクルを整理して研究をすすめてきた。今年度は3年目のまとめとして、第一に「深く考える」授業のための題材、教材、学習課題が本研究で期待する生徒の学習活動を引き起こすのにふさわしいものであったか。第二に、その授業における「視点を変える」活動を含めた生徒の学習プロセスが、本研究で目指す「深く考える」授業を保障する方向に向かうものであったか。この2点について、保健体育科として、授業を検証することが必要となる。

2. 研究の方向性

(1) 教科研究について

器械運動（マット運動）において、「きれいに倒立をするにはどうしたらよいか」という課題を生徒に与えると「両手と目線の位置で三角形をつくる」という答えに辿り着くだろう。（Plan）これは姿勢良く倒立するコツのひとつである体の頸反射（けいはんしゃ）を利用しているのだが、頸反射という言葉に辿り着けなくても「どうしてこの方法が良いのか」と考え、意識して練習する。（Do）周りの人に見てもらったり、自分自身で確認したりすること（Check）で、きれいな倒立姿勢ができるようになると気が付くと「もっと美しい倒立姿勢ができるようになりたい」「倒立姿勢を長く維持したい」という高みへの思いが生まれ、更に思考力を働かせることにつながる。（Action）

球技（ゴール型）において、「ボールを持たない（オフザボール）選手」がどうやって動けば味方からのパスがもらえるか」という課題に対し「オフボールの選手がゴールに向かって走ればよい」という答え（Plan）が返ってくる課題に対しての解答の一例である。しかし、実際にゴールに向かって走ってみると上手くいかない状況が出てくる。（Do）その時、「守備の隊形はどうなっているか、ボールはどの位置にあるか、どのようなパスを出すか。」など、様々な状況を見て思考（Check）し、幾つかある解答の中から最善の方法を判断し選択する（Action）ことが「深く考える」状態だと捉える。課題を前にして「考えて」実践した後、「もっと良い方法があるのではないか」「他の状況の時にはどのようにしたら良いのか」など、現状に満足することなくより質の高い解決を目指し、「考える」ことができるよう課題設定や場面設定、発問の工夫をしていくことが重要となる。

(2) 「視点を変える」について

生徒は与えられた「課題」に対して解決をしようと思ひ、思考したことを実践する。実践したことが必ずしも成

功するとは限らず、なぜ成功しなかったのかと再び思考する。その時、解決のヒントとなるのが「視点を変える」ことである。自分の見方や考え方を客観的に捉えようとしたり、他の見方や考え方との比較をしたりすることを行う。これにより、自分の見方や考え方が不十分であったり、偏りがあつたりすることに気づくことができたり、自分の見方や考え方を深めたり広めたりすることも可能である。しかし、ここで必要となるのが表現する力、伝える力である。自分が考えているイメージをいかに仲間に伝えることができるかによって、解決できなかった課題を解決しようと思ったり吟味したりしていきながら更に実践していくことで、生徒たちは「深く考える」状態に至る。そのために授業者は、全ての生徒が「深く考える」状態へと導くことができるよう「課題」を準備し、生徒が「課題を理解し思考できる」「解決方法を表現できる」「実践できる」ことを目指して研究を進めていく。

3. 研究の目的

生徒が、自らの課題解決のために様々な情報を集め、仲間と共に比較・検証、分析をすることで理解を深めながら課題を解決し、授業で学んだこのような姿勢や態度、課題解決のために思考したり方法を考えたりする力が日常生活で発揮できる生徒を確立する。

4. 研究の内容

- (1) 「単元計画」の見直しを行う。
- (2) 「教材・教具（タブレット端末）の工夫」を行う。
- (3) 「発問の工夫」を行う。

5. 研究の具体的な内容

ア 授業の見直しをもたせる

全ての単元で行うオリエンテーションを強化し、生徒に最終的な授業（発表・ゲーム）の様相をイメージさせる。単元計画の何時間目にどのような技能獲得の授業を展開するかを説明し、授業の計画を明確にする。

イ 課題を見付けるために情報を収集する

デジタルカメラやタブレット端末を使って撮影する際、何をどのように撮影するかを授業のめあてや計画に合わせた内容で探求することにより、課題解決のための資料をより具体的に探しやすくなる。

ウ 運動を比較・検証し、分析する

授業で使う学習ノートやワークシートを書かして終わりではなく、授業の中で「何故、上手くできなかったのか？上手くできたのか？」を個人だけでなく、ペアやチームの仲間とも共有し、考え合うことができるような発問を仕組む必要がある。

エ 出来映えを確認し、授業を振り返る

体育や保健に関わる内容としては、器械運動、陸上競技、水泳、武道、球技などの領域において、デジタルカメラやタブレット端末を用いて「動き」を撮影し、模範などと比較することにより、動きや技の改善点、高まりを見付けることができる。また、保健、体育理論などにおいてもインターネット上から参考資料を集め、考察する。

6 実践事例

授業者 村松 裕太

1 単元名 F 武道（柔道）

2 単元の見直し

- (1) 次の運動について、技ができる楽しさや喜びを味わい、基本動作や基本となる技ができるようにする。
 - ・柔道では、相手の動きに応じた基本動作から、基本となる技を用いて、投げたり抑えたりするなどの攻防を展開すること。

(2) 柔道に積極的に取り組むとともに、相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を守ろうとすること、分担した役割を果たそうとすることなどや、禁じ技を用いないなど健康・安全に気を配ることができるようにする。

(3) 柔道の特性や成り立ち、伝統的な考え方、技の名称や行い方、関連して高まる体力などを理解し、課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。

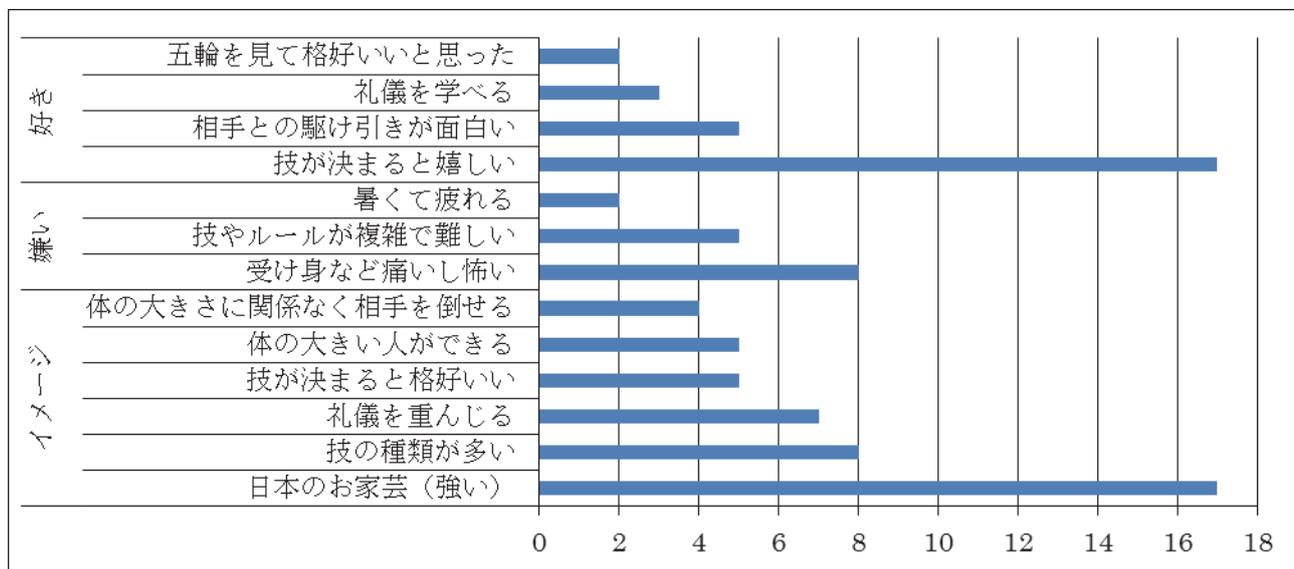
3 生徒の実態

2年2組は、男子20名、女子20名、合計40名の集団である。授業に対して前向きであり、男女とも仲が良く、仲間と協力しながら学習に取り組むことができる。活気ある学級の中で、男女ともに積極性の高い生徒が数人ずついて、授業のリーダーシップをとることができる。以下、アンケートによる実態調査である。

【アンケート集計結果（学年）】

質問項目	回答項目	1組		2組		3組		4組		合計
		男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
保健体育の授業は好きですか	好き	16	7	15	7	10	9	12	8	84
	どちらかという好き	2	7	5	9	7	9	8	10	57
	どちらかという嫌い	2	6	0	4	3	2	0	2	19
	嫌い	0	0	0	0	0	0	0	0	0
柔道の授業は好きですか	好き	4	3	5	4	7	1	4	5	33
	どちらかという好き	8	8	10	8	10	4	10	10	68
	どちらかという嫌い	7	6	5	8	0	13	6	5	50
	嫌い	1	3	0	0	3	2	0	0	9
今回のリオデジャネイロ五輪で柔道の試合を見ましたか	見た	7	7	11	4	7	5	9	7	57
	ニュース(報道)で見た	5	3	1	5	3	3	3	1	24
	見ていない	8	10	8	11	10	12	8	12	79
柔道を「好き」「嫌い」な理由	図1参照									
柔道のイメージ	図1参照									

図1【柔道を「好き」「嫌い」な理由及びイメージ（2年2組）】



4 単元及び学習活動に即した評価規準（●第1学年評価規準 ○第2学年評価規準 ◎1・2年共通）

	運動への関心・意欲・態度	運動についての思考・判断	運動の技能	運動についての知識・理解
単元の評価規準	◎武道の学習に積極的に取り組もうとしている。 ●相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を守ろうとしている。 ●分担した役割を果たそうとしている。 ◎仲間の学習を援助しようとしている。	◎技を身に付けるための運動の行い方のポイントを見付けている。 ◎課題に応じた練習方法を選んでいる。 ○仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた協力の仕方を見付けている。	◎投げたり抑えたりするなどの攻防を展開するための相手の動きに応じた基本動作から、基本となる技ができる。	●武道の特性や成り立ちについて、学習した具体例を挙げている。 ●武道の伝統的な考え方について、理解したことを言ったり書いたりしている。 ◎技の名称や行い方について、学習した具体例を挙げている。

	○禁じ技を用いないなど健康・安全に留意している。	●学習した安全上の留意点を他の練習場面に当てはめている。		○武道に関連して高まる体力について、学習した具体例を挙げている。 ○試合の行い方について学習した具体例を挙げている。
学習活動に即した評価規準	①柔道の学習に積極的に取り組もうとしている。 ②仲間と協力して練習したり、学習課題の解決に向けて仲間に助言したりしようとしている。 ③危険な動作や禁じ技を用いず、自己や仲間の健康や安全に留意している。	①技を身に付けるための運動の行い方のポイントを見付けている。 ②課題に応じた練習方法を選んでいる。 ③仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた協力の仕方を見付けている。	①正しい姿勢、組み方から崩しと体さばき、受け身を関連付けて行うことができる。 ②相手の動きに応じた基本動作から、投げ技の基本となる技を用いて、投げたり受けたりする攻防や、抑えたり返したりする攻防を展開することができる。	①技の名称や技術的なポイントについて、学習した具体例を挙げている。 ②柔道を継続することで、高まる体力要素について、学習した具体例を挙げている。 ③ごく簡単な試合におけるルール、審判の仕方について、学習した具体例を挙げている。

5 指導と評価の計画（12時間）

	時	ねらい・学習活動	関	思	技	知	評価方法
はじめ 1時間	1	<p>ねらい：○前年度の学習を振り返り、単元目標を立てよう。 ○学習の進め方と約束を確認しよう。</p> <p>学習の重点 ・前年度の学習を振り返り、見通しを立てること。 ・授業に対する姿勢の確認。 ・高まる体力について理解すること。</p> <p>活動：【オリエンテーション】 ○リオデジャネイロ五輪の柔道総集映像の視聴。 ○武道の特性やねらいを確認する。 ○学習の仕方について確認する ・学習の約束（ルールやマナー）、学習カードの書き方 ・ICT機器の使い方とグループでの活用法 ○グループ編成 ○柔道着の着方・帯の締め方・作法の確認</p>				②	観察 学習ノート
なか 9時間	2	<p>ねらい：○受け身を確認し、安全な活動ができるようにしよう。 ○既習技を確認し、攻防を楽しもう。</p> <p>活動Ⅰ：既習の「受け身」「固め技」「投げ技」を再確認し、その動作を身に付ける。 ・動作を身に付けるポイントを理解し、仲間と協力して学習する。</p>	③				
	3	<p>【受け身】 ○横受け身 長座 → 中腰 → ペア ○後ろ受け身 長座 → 中腰 → 立ち → ペア蹲踞</p>	③				観察

4	<p>○前回り受け身 立膝 → 立ち</p> <p>【固め技】</p> <p>○けさ固め, 横四方固め, 上四方固め</p> <p>頭タッチゲーム → 足側からの攻め → 背中合わせから対決</p> <p>学習の重点 ・既習技のポイントを確認し, 技をかけること。 ・健康, 安全に留意すること。</p> <p>【基本となる投げ技】</p> <p>まわし技系: ○体落とし ○大腰</p> <p>支え技系: ○膝車 ○支えつりこみ足</p> <p>基本動作と受け身の確認。</p> <p>男女4人1組でペアごとの動作を見取り, 協力した学習を進める。</p>				①	学習 ノート
5	<p>ねらい: 投げ技の基本動作を学習し, 正しく身に付けよう。</p> <p>学習の重点 ・基本動作を用いて, 刈り技をかけること。 ・健康, 安全に留意すること。</p>	①				
6	<p>【取り扱う基本となる投げ技】</p> <p>刈り技系: ○小内刈り (5, 6, 7時間目) ○大外刈り (8, 9, 10時間目)</p> <p>活動Ⅱ: 刈り技系の基本動作の確認</p>	②	①			
7	<p>・「崩し」「体さばき」「掛け」の動作と併せて「釣り手と引き手」, 受け身の確認をし, 基本動作を身に付ける。</p> <p>低い姿勢 → 立ち (ゆっくり)</p> <p>・「取」は「受」の袖を, 引き上げるように持ち, 最後は両手で「受」の袖を持つことを意識する。</p>		② ③	①		観察
8	<p>ねらい: 刈り技系の一連の動作が滑らかにできるように, 自分の課題を発見しよう。</p> <p>学習の重点 ・刈り技を身に付けるために, 自分の課題を見付けること。 ・仲間と協力し, 課題解決に向けて仲間に助言すること。</p> <p>活動Ⅲ: 技術習得のために, ICTを活用し, 仲間同士の見取りとアドバイスで, 自らの課題を発見する。 ・見本の映像とICTで撮影した自分の様子の比較で, 課題を見付ける。</p>	①				学習 ノート
9	<p>ねらい: 刈り技系の自分の課題を解決するために, グループで協力して活動しよう。</p> <p>学習の重点 ・刈り技を身に付けるために, グループで役割を決め, 自分の課題に応じた学習活動を行なうこと。 ・「取」と「受」の協力で, 技を行なうこと。</p> <p>活動Ⅳ: ICTを活用し, 課題を解決し, 刈り技系を身に付ける。 ・グループで役割分担し, 課題に合った学習を行なう。</p>	②	①			
10	<p>ねらい: 刈り技系の自分の課題を解決するために, グループで協力して活動しよう。</p> <p>学習の重点 ・刈り技を身に付けるために, グループで役割を決め, 自分の課題に応じた学習活動を行なうこと。 ・「取」と「受」の協力で, 技を行なうこと。</p> <p>活動Ⅳ: ICTを活用し, 課題を解決し, 刈り技系を身に付ける。 ・グループで役割分担し, 課題に合った学習を行なう。</p>		② ③	①		

ま と め 2 時 間	11	<p>ねらい： 簡単な試合で、相手の動きに応じた基本動作から、基本となる投げ技を用いて、投げたり、受けたりする攻防を楽しもう。</p> <p>学習の重点： ・相手の動きに応じて、攻防を展開すること。 ・勝負の判定やルール、審判の仕方を理解すること。 ・礼法や相手を尊重する態度をもつこと。</p>			②	①	観 察 学 習 ノ ー ト
	12	<p>【簡単な試合】 ○既習技で、相手の動きに応じて攻防する。 →3年次の連絡技への導入</p> <p>【学習のまとめ】 ○学習ノートへの記入、評価、振り返り</p>			②	③	

6 具体の指導内容及び学習活動に即した評価規準

観 点	運動への 関心・意欲・態度	運動についての 思考・判断	運動の技能	運動についての 知識・理解
第 2 学 年	<p>【指導内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・技ができる楽しさや喜びを味わうこと。 ・基本動作や基本となる技ができるように積極的に取り組むこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT機器の活用や仲間同士の見取りで、技を掛けるための崩しや体さばき、掛けなどのポイントを見付けている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・正しい姿勢、組み方から、取と受の協力で基本的な技を行なうこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・技には名称があり、技を身に付けるための技術的なポイント（崩しや体さばき、掛けなど）があること。
	<p>【評価規準】</p> <p>①柔道の学習に積極的に取り組もうとしている。</p>	<p>①技を身に付けるための運動の行い方のポイントを見付けている。</p>	<p>①正しい姿勢、組み方から崩しと体さばき、受け身を関連づけて行うことができる。</p>	<p>①技の名称や技術的なポイントについて、学習した具体例を挙げている。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・学習課題の解決に向けて仲間に助言すること。 ・自己能力を高めたり、仲間の学習を援助したり、連帯感を高めて気持ちよく活動すること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自らの課題に応じて、活動の仕方や練習方法を、学習場面に適用したり、応用したりすること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の動きに応じて、姿勢と組み方、進退動作、崩しと体さばきで、投げ技や抑え技、受け身を行なうこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・柔道を継続することで、主として瞬発力や筋持久力、巧緻性などがそれぞれの技に関連して高められること。
	<p>②仲間と協力して練習したり、学習課題の解決に向けて仲間に助言したりしようとしている。</p>	<p>②課題に応じた練習方法を選んでいる。</p>	<p>②相手の動きに応じた基本動作から、投げ技の基本となる技を用いて、投げたり受けたりする攻防や、抑えたり返したりする攻防を展開することができる。</p>	<p>②柔道を継続することで、高まる体力要素について理解している。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・活動場所や用具に配慮し、危険を予測した状況判断で、自己や仲間の安全に留意した行動をとること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・技術習得のために、ICT機器で撮影や見取る役割を、グループで協力して活動すること。 		<ul style="list-style-type: none"> ・勝負の判定や禁止事項などのルールや、審判の合図があること。
<p>③危険な動作や禁じ技をせず、畳やマットを整え隙間をなくす、他の組との間隔を十分とって活動するなど自己や仲間の安全に留意している。</p>	<p>③仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた協力の仕方を見付けている。</p>		<p>③ごく簡単な試合におけるルール、審判の仕方について理解している。</p>	

7 本時の展開 (9/12時間)

(1) 本時の目標

- ・ICT機器を活用し、技を滑らかに行うための動作のポイントを見付けられるようにする。
- ・仲間と協力して練習したり、学習課題の解決に向けてお互いに助言したりしようとする。

(2) 本時の学習評価

- ・技を身に付けるための運動の行い方のポイントを見付けている。【運動についての思考・判断】

(3) 展開

	学習内容・活動	評価方法及び評価規準 指導上の留意点
はじめ	<p>1 ランニング・補強運動 (腹筋, 背筋, 腕立て, 馬跳び, 首, 前転, 後転, 後ろ受け身)</p> <p>2 あいさつ, 本時の学習のねらいと内容の確認</p>	<p>・本時の学習内容を伝えるとともに, 前回までの学習内容の確認をさせる。</p>
	<p>ねらい: 大外刈りの一連の動作が滑らかにできるように, 自分の課題を発見しよう。</p>	
なか	<p>3 前回の学習内容の確認 ・約束練習で, 立った状態からの大外刈りを行う。 (「取」は「受」の袖を, 引き上げるように持ち, 最後は両手で「受」の袖を持つことを意識する。)</p> <p>4 大外刈りを分析するための活動① ・大外刈りの様子をタブレットで動画を撮影する。 ・グループで協力して活動する。 例) 「取」, 「受」, ICT機器, 「見取り・安全管理」 → 撮影終了後, 自分が考える課題をまとめる。 (「自分なりの結論」を各自が整理しておく。)</p> <p>5 大外刈りを分析するための活動② 【視点を変える活動Ⅰ】 プロジェクターを使い, 大外刈りの一連の動作が滑らかに行われている見本の映像の確認。 (見本の映像はipadのアプリでも確認できる。)</p> <p>6 大外刈りを分析するための活動③ ・自他の大外刈りの映像と見本の映像や比較し, 課題を見付けようとしたり, 気づいたことを助言したりアドバイスをする。</p> <p>7 大外刈りを分析するための活動④ 【視点を変える活動Ⅱ】 ・他のグループの発表を聞き合い, 情報の共有を図ることで, 自分の振り返り活動に繋げる。</p>	<p>○「崩し」「体さばき」「掛け」の動作を確認させる。 ・「取」は, 釣り手と引き手を使い, 「受」を右後ろ隅に崩す。 ・「取」は, 左足前さばきで, 左足を「受」の右足横に踏み込む。 ・「取」は, 右足を大きく振り上げ, 自分の右膝の裏と「受」の右膝の裏が合う。 ・グループで順番に活動させる。 ○活動と撮影を順番に行わせる。 ○「取」と「受」の様子を, 統一して確認できるよう撮影方向を合わせる。(「取」は観察者から見て右側に立つ) ○周りのグループにぶつかることがないように安全に配慮させる。(投げ込みマットも使用可) ○観察して, 自分で課題に気付いたり, 仲間の課題を見付けたりした内容を伝える。</p> <p>評価: 技を身に付けるための運動の行い方のポイントを見付けている。 【運動についての思考・判断】</p> <p>○助言されたことも学習カードに記入し, 自己の課題を明確にする。</p> <p>【桐華館】 入り口</p> <div style="border: 1px solid blue; border-radius: 15px; padding: 10px; display: flex; justify-content: space-around; width: 100%;"> <div style="border: 1px solid blue; border-radius: 10px; padding: 5px; text-align: center;"> <p>畳</p> </div> <div style="border: 1px solid blue; border-radius: 10px; padding: 5px; text-align: center;"> <p>板</p> </div> </div>
まとめ	<p>8 本時の振り返りと次回への課題の設定 ・学習ノートに振り返りと次時の課題を記入する。 ・次時の学習内容の確認</p> <p>9 あいさつ</p>	<p>○本時の学習への取り組み状況や, 課題を振り返りさせ, 次時への繋がるよう学習カードに記入させる。</p>

本時で期待する生徒の姿（生徒が深く考える状態を表しているだろうと思われる現象）

- 大外刈りの見本映像を見て自分の大外刈りの映像と比較した時、自分が思っていたこと（あるいはできたと思ってやっていたこと）と実際の違いに気づいた発言や学習ノートへの記述。
- 仲間と協力して滑らかな大外刈りの習得に向けたコツやポイントを探している時、仲間からのアドバイス（気づいたこと、できていないことの助言等）で、自分が思っていたことと実際の違いに気づいた発言や学習ノートへの記述。
- 他のグループの発表を聞き、情報の共有を図る時、自分の課題の解決にも必要なポイントではないだろうかと考えた発言や学習ノートへの記述。

例)・釣りの動作が弱く、「受」を右後ろ隅に崩し切れていないため、技を掛けても勢いよく倒せていない。
・左足前さばきで出す左足の位置が浅く、「掛け」の動作に力が伝わっていないようだ。
・体さばきにテンポがないので、滑らかさが出していない。
・「掛け」の動作で、右足の振り上げが小さく力強さがなく、技に滑らかさが出していない。

本時で期待する生徒の姿を引き出すための手立て

①「視点を変える」活動

- ・見本の映像と自分の映像の比較。
- ・仲間からのアドバイス。（気づいたことの助言、できていないことの助言等）
- ・他のグループの発表で、仲間の課題の情報を共有。

②「視点を変える」活動を効果的にする教師のはたらきかけ

- ・ポイントを整理しやすいように、発問を掲示するなどの工夫を行う。
- ・見本の映像では、本物の柔道家が行っている映像を用意する。
- ・情報の共有を図るための発表は、口頭だけでは伝わりにくいので、視覚教材を使いながら生徒に説明させる。

(4) 本時の振り返り

生徒が書いた学習ノートの記述からも分かるように、大外刈りの一連の動作が滑らかにできていない原因を、タブレット端末に写された映像を見て、見本の映像と比較したり、検証したり、分析していくことで、課題を解決するための手だてを考え導きだしている。

本時の目標「大外刈りの一連の動作が滑らかにできるように、自分の課題を発見しよう。」

「生徒の学習ノートの記述①」

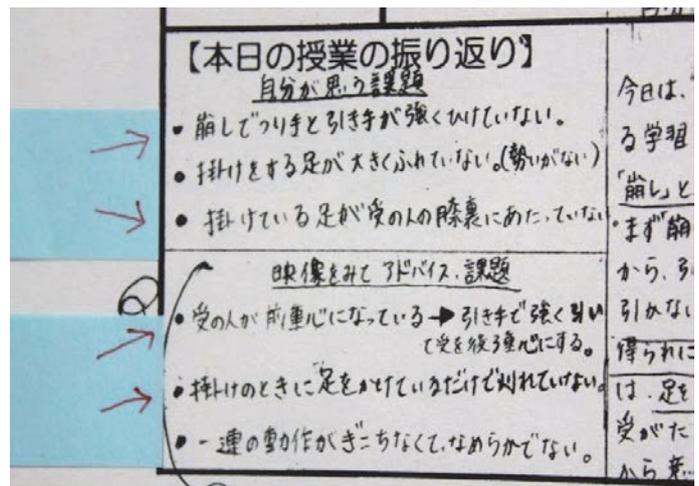
自分なりの結論①

「崩し」で強く引けていないこと
「掛け」の勢いと位置の相違



視点が変わり深く考えた結果

相手を後ろ重心にすること
掛けるだけでなく「刈る」動作をいれること



「生徒の学習ノートの記事②」

自分なりの結論②

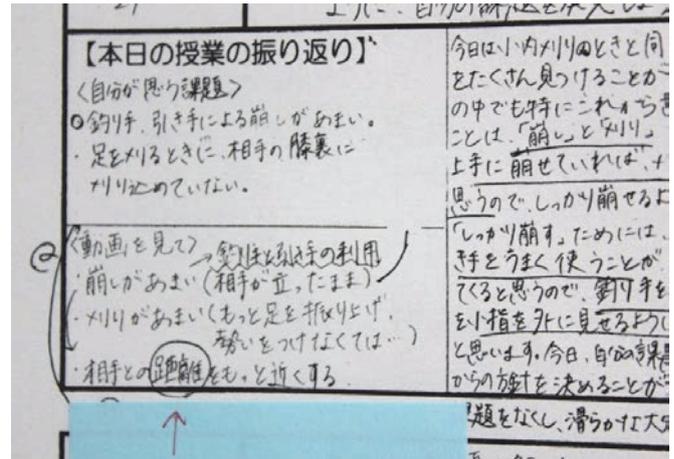
「崩し」の甘さと「掛け」の位置



映像を見た後

視点を変え深く考えた結果

相手との距離感を近くすること

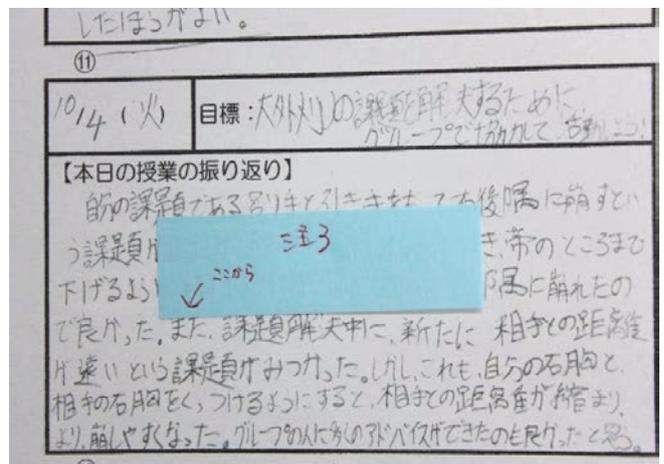


※ 見つけられた課題に対し、解決する手だてが出てきた。

「生徒の学習ノートの記事③」

また、導き出した答えを吟味し、更なる高みへと繋げていこうとする（「深く考える」）ことは、タブレット端末の使用や仲間同士のアドバイス、意見交流の際にのみ行われているのではなく、身体活動の最中にも行われている。そのことを学習ノートの記述からも見取ることができた。

こうした記述は本研究にとって価値のある成果であり、「深く考える」授業を積み重ねてきた産物と捉えている。



7. 研究のまとめ

今年度の研究では、単元計画に沿って授業を進めていく中に学習プロセスのPDCAサイクルを整理しながら研究をすすめてきた。授業の中で出された課題に対して生徒はそれぞれの見解をもち (Plan)、それを表現したり、試してみたりすること (Do) によってペアやグループ内で共有・共感することができた。課題解決に有効な答えであるかどうかを個人やグループ内で吟味 (Check) することで、新たな解決法や最善の答えを導き出そうと更に思考を働かせる (Action) という過程が実践できるように取り組んできた。

3年目の研究のまとめとして、本研究で期待する生徒の学習活動として「深く考える」授業が展開されるような題材、教材、学習課題が設定されていたのかどうかという点について振り返る。年間指導計画に基づき計画的に単元を進めていく中、授業で生徒に提示する「めあて」は、課題に対して一つの答えを目指すだけでなく、答えにつながるヒントやいくつもある答えの中のどれかを見つけることができるような投げかけをしたり、全体でそれぞれの考え方を共有する場面を継続的に設定したりすることで、吟味 (Check) し思考を働かせる (Action) 生徒の姿を見ることができるようになった。

バドミントンの授業で記入している学習ノートに「シャトルを遠くへ飛ばすために腕の力だけでなく上半身や手首のひねりを使い、効率よく飛ばすことができるような打ち方を自分ができているかどうか確認したい」という内容の記述が見られた。これは「ラケット操作技能を高め、狙った場所にシャトルを打ち込もう」という授業の目標から、「どのようにラケットを使って腕を振れば、シャトルを自由自在に飛ばすことができるのだろうか」という生徒自身の課題設定に基づき思考した結果、解決策の一つとしてシャトルを打つフォームのチェックをするという方法に辿り着いた。授業の目標から自分自身の現状を把握し、目標の達成のために自分ができている解決策を思考して探す生徒は大勢見られるようになってきた。以前は、課題解決のための方法を自分で考えて選択し、解決を目指して練習していたが、既習事項から考え出された解決方法が最善であるのかどうかを検討するために仲間と協力してもらったり、表現して伝えたり、意見交流をしたりして、より良い解決方法を仲間と協働的に探ろうとする姿勢や学習方法が身につ

てきたことは、研究をしてきた結果であり成果であると考えられる。自分自身の考え方だけで完結するのではなく、自分自身の考え方が正しいのか、それとも他に何か良い方法があるのかと思考錯誤する生徒の姿は、これまで保健体育科が「自ら考え、主体的に取り組む体育学習」について研究してきた成果であり、視点が変わる見方からの課題に対するアプローチによって生徒は「深く考える」状態となって学習に取り組んでいるといえる。こういった「学び」に対する姿勢は、授業だけでなく日常生活の中でも見られ、生きる力となって発揮されることが今後の目標であり、保健体育科が目指す生徒の姿である。

8. 参考・引用文献

文部科学省「中学校学習指導要領」 日本文教出版（2008）

文部科学省「中学校学習指導要領解説 保健体育科編」 日本文教出版（2008）

2014年4月 体育科教育，大修館書店「教具・遊具」の工夫と開発 岩田 靖

2012年12月 体育科教育，大修館書店 子供を揺さぶる発問 大後戸 一樹